

「土砂災害に思うこと」

宮崎県 延岡市立西階中学校 3年 菊池 十輝

お盆休みのちょうどこの頃でした。その時、自分は小学生で諸塚村に住んでおり、日向に出かけた帰り道のことだったと思います。それまでスムーズに走っていた車の窓から、前の方でバスやトラックなどが連なって止まっているのが見えました。何が起きているのかわかりませんでしたが、自分たちの車も速度を落としてそこに行ってみると、ガラガラという岩が落ちる音とその岩が木々をなぎ倒すバキバキという音が雨の降る暗闇の中に響いていました。更に近づいてみると、車のライトには直径3メートルを超える巨大な岩と、大量の土砂が道を塞いでいる光景が映し出されていました。初めて見る光景にとっても驚きました。そんな中、父と母は土木関係の仕事をしていることもあり、土木事務所や警察などに電話をしたり、後続車が突っ込まないように声を掛けて回り、立ち往生している車を誘導したりしていました。その間、車内には姉と2人だけになり、とても心細くて、不気味な音にここまで土砂が来たらどうしようという不安な気持ちになったことを覚えています。結局、その道路は全く通れなくなったので、普段は使わない狭い迂回路を回って帰りました。

その後、その道路は交通規制がされていましたが、崩壊したところの復旧工事が終わり、今までのように通れるようになりました。諸塚村や椎葉村に住んでいる人たちにとっては主要な生活道だったので、その間の2年以上はかなり不便だったと思います。

父に聞いた話によると、山に降った雨が浸透し、岩盤と柔らかい地層の間に水の道ができてしまったことによって、少しずつ山をずらしていたのだそうです。自分が遭遇した土砂崩れの場面は、その少しずつのずれが蓄積して耐え切れなくなった瞬間だったのだと教えてもらいました。普段、山には木々が茂り表面は見えません。山の内部でそういうメカニズムが繰り返されていたとしても、それに人間が気付くのはかなり困難なことだと思います。実際に、あの土砂崩れも自分たちを含め走っていた車が1台も巻き込まれなかったことは幸運だったと感じました。

近年、毎年のように地震や台風、異常気象などによる自然災害が日本各地で起こっています。平成30年7月には西日本が記録的な豪雨に見舞われ、じんだな被害が発生しました。ヘリコプターから撮影された浸水した地域の映像や、土石流に押しつぶされた家屋の映像と共に、各地の被害状況が次々と報道され、がくぜんとニュースを見た記憶があります。更にその2か月後には北海道で震度7の地震により、広い範囲で大規模な土砂崩れが発生し、多くの山々の斜面がいっせいに崩れ落ちました。どちらの災害でも多くの死者、行方不明者が出る大惨事となりました。自分が遭遇した土砂崩れは、近年報道されるような大きなものではありませんでしたが、それでも人間の力では到底かなわない自然の力であったことは、自分の目で直に見て分かりました。

今年もすでに梅雨や台風による浸水や土砂崩れが様々な地域で発生しています。「記録的短時間大雨情報」「土砂災害警戒情報」など、これまではあまり聞きなれなかった言葉や、携帯電話から避難情報を発令する大音量の緊急アラームを頻繁に耳にするようになりました。このような状況を考えると、異常気象による被害はいつ、どこで、誰に降りかかるのか予測が難しいと思います。また、数年前と比較しても、大規模な浸水や土砂崩れが起これうる要因が格段に増えていると感じます。

日本各地で起こった災害は、今や数えきれないほど多くなっていますが、その反面、災害に強い街づくりや地域を挙げての復興が進められています。新しい技術や情報も、気象観測の分野、建築・建設の分野、その他諸々の分野で発展しています。これからの時代を生きていく自分たちは、これからも刻一刻と変化していく環境と、共存していかなくてはなりません。1人1人が身の回りの自然について少しでも関心を持ち、防災について考えることが、災害から自分の身を守ることへの第一歩につながるのではないかと思います。そして、じんだな災害にあった自然や町がより良好な状態に再建することができる社会がこれからも続いてほしいです。そのような社会の中で、役に立つ人に自分もなりたいと思います。